

国
(問題)
語

2011年度

〈2011 H23052020〉

注 意 事 項

- 1 問題冊子は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は2～10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべてマーク解答用紙の所定欄に、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルでマークすること。
- 4 氏名は、試験開始後、マーク解答用紙の所定欄に正しくていねいに記入すること。
- 5 マークははつきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムでていねいに、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ヨーロッパで写真が発明されたのは一九世紀の前半だが、その発明直後から複製メディアとして大きな成功を収めたのは、まさしくそれが大衆社会の到来に重なっていたからである。それ以来レンズは多くの人間の集団を写してきた。人間は生まれてから死ぬまで、その人生の節目ごとに写真に撮られてきた。家族写真にはじまり、学校や会社、あるいは村や町などの祭りや

A

行事には必ず記念写真が付き物であり、集団はイメージによって記録されてきた。

一九世紀後半には南北戦争やクリミア戦争にも写真家が駆けつけて、写真が報道の分野に大きな一歩を踏み出してゆく。おそらく人類は、この一七〇年にかぎってみても、それ以前に生産されたイメージよりも多くの映像を残してきただろう。わたしたちが一日のあいだに目にすることの映像の量が、中世に生きた人間が一生のあいだに出会う絵の量をはるかに超えているとしても、なんら不思議はない。

時代が動くとき、それはしばしば大きな群衆現象を伴う。一九八九年の秋から冬にかけて、旧ソ連と東ヨーロッパで起きた一連の革命は、日増しに大々となるデモや集会が雪崩のようにして、当時の政権を倒していった。わたし自身それらのデモや集会、あるいはその後続く内戦などを見つめてきたが、二一世紀も最初の一〇年を過ぎようとするいま、時代を動かしてゆく群衆のあり方が、すこし変わってきているようにみえる。その変化は当然、社会の変化と連携しているはずである。

少なくともベルリンの壁が崩壊するまで、¹群衆現象はマスメディアと切り離すことの出来ない関係にあった。権力は群衆のなかから生まれ、また群衆は権力との緊張関係のなかに存在するが、その関係をとるものとしてマスメディアが、大きな影響力をもってきたことはあらためていうまでもない。その役割自体にそれほどの変化はないが、個人の側から見ると、わたしたちが現在手にしている新しい種類のメディアには驚くべきものがある。言うまでもなく、小型の情報通信端末と、それに向けたさまざまなサービスである。メディアの小型化と複合化とともに、情報の配信技術も高度化し、映像や音楽をいつでもどこでも受信するだけでなく、個人がさまざまな情報を配信することも日常的な活動となっている。

この変化の特徴のひとつは、メディアが家や家庭といった、特定の場所に固定されることから完全に解放された点にある。^(注)モバイルという言葉がタンの示しているように、^a受信と発信の核となる移動型のパーソナルメディアが爆発的に拡大している。その一方で、超小型化したコンピューターが、人間社会のいたるところに入り込み、いまわたしたちは朝目覚めてから夜寝るまで、いや寝ているあいだでさえ、コンピューターの存在から逃れることはできない。電子マネーを例にとるまでもなく、情報化社会は人間の社会活動のすべてがコンピューターを介して執り行われる方向へと、つき進んでいる。

そのことがもたらす³効率や安全の旗印と引き換えに、わたしたちが非常に厳しい管理と監視の社会に生きなければならぬことも、なかば事実である。情報管理が行き届いた現在、二〇世紀の群衆がマスメディアと取り持っていた関係とは、質的に違う状態へ入りつつあることは、誰もが肌で感じていることではないだろうか。ポスト産業化社会ならぬ、ポスト情報化社会に、この地球全体が入りつつあることを、群衆を眺めてきた者のひとりとして実感するのだ。そしてこのことが今日の群衆に、新たな性格を与え始めているように思える。それは互いに関係している、ふたつの増大によって特徴づけられる。

そのひとつは、擬似群衆の増大と呼ぶことができるだろう。インターネット上に形成されている、さまざまなコミュニティを想像すると分かりやすいかもしれない。Twitterのように言葉を介している場合もあれば、オンラインゲームのようにアクションの共有によって形成されている群衆もある。あるいは登録している数が数百万という、仮想の都市「セカンドライフ」。すでに各国の企業が出資しているばかりでなく、セカンドライフ上にギャラリーや美術館をオープンするアーティストも出てきている。

こうした、実空間では互いに隔離されているのに、情報空間では互いに影響を与えられる具体的な関係をもっている擬似的な群衆が、実在の群衆を凌駕してしまうという現実である。これはお茶の間でテレビの前に座っているあいだに形成されている、視聴者という名の群衆とは明らかに異なる性格のものだ。それは物理的な建築を必要としない、新しい都市であり、どこにも場所をもたないが、あらゆるところに存在しているとも言える空間である。⁴わたしたちが生きる都市とは、この空間と絶え間のないイメージ交換によって成立している。

もうひとつは、

B

の増大と仮に呼ぶことができるだろう。かつてなかったほどの多くの情報チャネルをもった個人は、意思の決定を先延ばしにする傾向がある。それは必ずしも、待ち合わせの場所をあらかじめ決めないというような、単なる習慣の変化ではない。残されている時間がある限り、より多くの情報を手にしつつ、最後の瞬間まで心を決めない。決定しない群衆が、購買から投票までさまざまな局面において、影響を増してゆくのではないか。たとえば選挙にかんするアンケートで「分からない」と回答する比率が多いとき、必ずしもそれは消極的な意見を表しているのではないのかもしれない。それこそが擬似群衆に特有の態度であるかもしれない。

このような特徴を潜在させてレンズの前にたち現れる人間たちは、かつてとは違った装いをしているのだろうか。歴史上さまざまな群衆が記録されてきたが、ポスト情報化社会を形成する最大の群衆は、目に見えないのではないか。それをひとことで表すならば、「待機する群衆」ではないかと思う。都市だけではない。地球上のどこにいても、情報システムをつうじてつながっている群衆は、常に何かを待っている。たとえば労働の場において、非正規社員や移民労働者の不当解雇が世界規模の問題となっているが、それは見方を変えたと、常に待機することを^b儀なくされる人々が爆発的に増大しているということではないかと思うのである。

彼女や彼は、掌の小さな画面を見つめながら、何かを待っている。待つ群衆がいかなる力を潜在させているのか、それが見えてくるかどうかは、芸術にとっても政治にとっても、無視のできないテーマになるであろう。

(港千尋「疑似群衆の時代」による)

(注) モバイル：「移動性のある」の意で、小型で携帯できる情報通信機器を形容する際に用いられる。

問一 空欄

A

に入る二字の熟語を、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 葬礼 □ 集団 ハ 重要 ニ 年中 ホ 協賛

問二 傍線部 a・b にあたる漢字を含むものを、次のイ～ホの中から一つずつ選び、その解答欄にマークせよ。

a イ 元タン □ 異タン ハ 破タン ニ 落タン ホ 驚タン
b イ ヨ裕 □ 名ヨ ハ ヨ金 ニ 贈ヨ ホ ヨ想

問三 傍線部 1 は、具体的にはどういうことか、その説明として最も適切なものを次のイ～ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

解答欄にマークせよ。

イ 新聞や雑誌のようなマスメディアが、多くの人々によって購入されることで利益をあげ、部数をのばして発展してきたということ。

□ 大衆社会においてはことあるごとに写真を撮ることが当然のこととなっていたため、群衆もその中で記録され、マスメディアの中にイメージとして残されていくこと。

ハ マスメディアは、多くの読者、視聴者を対象としており、集団に影響を与えるため、偏りのない情報を流すことが求められてきたこと。

ニ テレビや新聞の情報によって人々が集まって行動したり、群衆の行動をそれらメディアが報じることで、より大きな行動を引き起こしたりすること。

問四

傍線部 2 「新しい種類のメディア」とあるが、本文ではこれらがどのような変化をもたらしたとしているか。その説明として最も適切なものを次のイ～ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 情報通信端末の普及により、職場や学校といった場所にとらわれず、どこでも映像が見られるようになった。

□ 誰でも、どこからでも、多くの人に向けた文章や映像を気軽に送信することができるようになった。

ハ 新たな映像技術によって、実際には存在しない人物や事物が細部まで細かく映像化できるようになった。

ニ 遠くで起こった出来事が多くの人々に知られることによって、誰しもが情報を共有できるようになった。

問五 傍線部3の具体的な事例として適切でないものを、次のイ～二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 匿名、別名で意見を述べたり、コミュニケーションを行う機会が増えることで、無責任で一方的な情報が流される危険性が生じる。

ロ 容易に買い物や取引ができる一方で、自分の買い物の傾向や好みについての情報が、別の企業に売り渡される危険性も生まれる。

ハ 携帯電話を使うことで、その通信内容や、どこで何をしていたかが記録として残されたり、誰かに見られたりする危険性が出てくる。

二 学校の中の色々な場所を映像で映し出すことで、不審者が入ってくることを防止できる反面、学生までもそれによって常に見張られる危険性がある。

問六 空欄 B にあてはまる言葉を次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 非論理性 ロ 非日常性 ハ 非決定性 ニ 非現実性 ホ 非公開性

問七 傍線部4はどういうことか。その説明として最も適切なものを次のイ～二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ インターネット上の仮想の集団やコミュニティは、私たちが生きている実際の空間とは別であり、現実とかけはなれた意見やイメージが交換されている。

ロ 実際にはばらばらな場所にいる人々が、互いにイメージを交換しあうことにより、あたかも一つの場所に集まっているかのような認識が生まれる。

ハ 仮想空間の中で生まれた評価や意見が、そこにあたかも群衆が存在しているかのようなイメージを作り出し、そのイメージが現代の群衆を作り上げている。

二 現代は、インターネット上の意見やコミュニケーションからの影響が大きいために、私たちの都市は、それら仮想の空間に近い形をとりはじめている。

問八 本文の中で、筆者は現在の群衆の特徴をいかにとらえているか。その説明として最も適切なものを次のイ～二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 仮想空間で生まれた意見や評価は、実際に人が集まった群衆によるものではないが、今日では実際の群衆よりも強い影響力さえ持っている。

ロ 写真というメディアは大衆社会とともに生まれ、群衆を記録してきているので、現代の群衆もまた写真からその性質をとらえることが有効である。

ハ 厳しい管理と監視の中にある現代社会では、自分の行動を目立たせないよう、自身の決定を表明しない傾向が群衆の中に生まれている。

二 「待機する群衆」は、特定の思想をもって積極的に集まって行動するわけではないので、現実には社会を変えていく力となることは難しい。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

情緒という現象は、他者との関係性に規定される。われわれの情緒は、多くの場合、他者との関係性のなかで一喜一憂する。しかし、どこにアイデンティティがあるかによって、一喜一憂の仕方に変化が見られる。アイデンティティのある事柄でダメージを受ければ、大きなショックを受ける。それでも現実を生きていかなければならない。人生の厳しさを受け入れながら、前向きに生きてゆかなければならない。人によっては、ダメージによって、自信を喪失する場合もある。

したがって、情緒的自立とアイデンティティの関係は、アイデンティティの確立が情緒的自立を促す側面と、逆に、情緒的自立がアイデンティティの確立を促す側面を、併せ持っている。両者は、相互性の中でお互いを高めあう。

生き方の難しい時代にあつて、この二つのキーワードは、それ自体大きな課題でもある。この二つのキーワードをめぐっては、アイデンティティの強さが、より高い情緒的自立を促すといった弁証法的な関係を読み取ることもできる。しかし、現実には、この二つのキーワードを回避するかのような振る舞い方が増えているように見える。

情緒的自立とアイデンティティは、密接な関係にあるが、この二つのキーワードが回避される背景には、自己の未成熟をはじめ、関係性を生きたる力の低下を読み取ることができる。関係性を生きたる力を回復させようと想えば、アイデンティティの確立が必要である。またアイデンティティを確立しようと想えば、他者と誠実に向き合い葛藤と対峙し、それを乗り越えていく経験が必要である。したがって、情緒的自立は、¹これらの結果でもある。情緒的自立が確立されれば、関係性を生きたる力もより強化されるであろう。

しかし、現実には、これらが回避される傾向にある。

組織のなかでは、自分が納得できなければ、そこから行動が前に進まず、そのことが組織の動きに停滞をもたらすということが時折見られる。その当事者にとって、納得がゆかないということと、組織の課題がせめぎ合うことになるのだが、その人が納得できないことで作業が滞ってしまう。周囲からは、その場の状況に応じて A 能力が求められる。個人が納得することと組織課題を遂行することのジレンマとも表現できる。この二つの課題が、せめぎ合うとき、自己が納得することにこだわれば、組織課題の遂行に影響が生じる。逆に、組織課題の遂行を最優先すると、個人の納得はどうでもよい問題になる。²「個としての自立」が内面化される程度に応じて、自己が納得することこだわ人々が増えてきたように想う。そのスタンスは、あくまでも自己に置かれる。したがって、組織課題の遂行については、二の次になる。組織の中で議論をしても、些細なことに納得ができず、会議の時間が浪費されることが少なくない。彼らにとって、大事なことは、自己の納得であり、自己の主張を通すことであるかのようなうだ。このような場面に遭遇するたびに、何とも言いようのない³労働感を味わう。

そのような振る舞いをする人々の行動は、時間が自分だけに用意されていると錯覚しているのではないかと思うことがある。もつと言え、われわれは、限られた時間のなかで生きている。その時間は、参加している人々全てにとって貴重な時間である。それを自分が納得できないからといって、延々と引き伸ばす姿勢は、周囲への配慮がないと思われる。でも仕方がない。

このような事例を、「関係性のなかでの自立」、あるいは関係性を生きたる力という視点で読み解いていくと、自己の考え方に依拠してのみ議論を展開していることになる。周囲が、不快になるのももつともなことである。逆に、周囲や時間のことばかり気にして、分かったような顔をして対処することが良いわけではない。自己が納得することにこだわることも、周囲がどの程度見えていて、そのような振る舞いを継続するのは、引き際をわきまえておくことが重要ということだろう。自己としては納得しているわけではないが、これ以上議事を遅滞させるわけにはいかないというその場の状況が見えておれば、⁴引き際という感覚が、関係性を生きていることに繋がるように想える。もちろん、そのような振る舞い方を積み重ねていくを通して、情緒的自立が獲得されていくのではない。

また関係性を生きたることには、葛藤がつきものだ。何かにチャレンジし、自己の想いが叶えられないとき、その反応は、他者に対する不満か、自己の未熟さを受容するか、のどちらかしかない。他者に対する不満をぶつければ、その他者を葛藤状況に追い込む可能性が生まれる。この場合、自己の気持ちはすっきりするかもしれないが、他者はまた一つ新たな課題を抱えることになる。逆に、自己の未熟さを受容することも、そのチャレンジが自己にとってアイデンティティのあることがらであれば、ダメージが大きい。それでもそのことを受け入れていかなければならない。この場合における関係性を生きたるという意味は、こちらが自己主張を強くすればするほど、相手を追い詰めていくことになる。し

たがって、そのことを配慮しつつ、自己の想いを返しておく。これが、他者においても同時に、相互性のなかで展開される。これが、⁵関係性を生きるという現象ではないか。このような現象は、他者と誠実に向き合わない限り、生まれない。また他者と誠実に向き合うということは、相手にとって辛いと思われることがらであっても率直に伝える勇気を必要とする。このような関係性を生きること、葛藤は常に付きまといっている。

このような関係性を生きることができると通して、情緒的自立は確立されていく。したがって、「情緒的自立のすすめ」とは、

B

に執着することなく、また他者に執着することなく、関係性を生き、自己は

C

であるという感覚を維持することのできるような生き方をしているというメッセージである。このような生き方は、決して容易ではないが、不可能ではない。

なぜそのような生き方を志向することが望ましいと言えるのか。それは、ほんとうの意味で関係性を生きることが、他者の存在を大事にしながら、自己の気持ちや想いも大事にすることでもあれば、そのような生き方を通して、他者との関係性における気持ちや想いの相互性を体験することが出来る。そして、その相互性を通して、

D

という存在が、かけがえない愛しい存在として受容される。

われわれが、今日の社会で経験する感情の多くは、怒りや哀しみといった負の感情であることが多い。喜びや楽しみといった肯定的な感情を経験することは、少ない。これに対して、「関係性のなかでの自立」を志向することは、関係性を生きることでもあれば、その関係性を生きることを通して体験する喜怒哀楽の感情と、それが関係性のなかで共有されることを通して、関係性それ自体の深まりを可能にする。そして、このことを通して、他者という存在が、信頼の対象としても浮上してくる。したがって、関係性を生きる力は、現代人が失いかけている他者に対する信頼、愛する力といったもの呼び起こすきっかけになるかもしれない。

人間不信に満ちた今日の社会にあつて、他者の存在が信頼にたつかもしれないと想えることは、希望でもある。いまだ一度、他者を信頼してみようと前向きに生きることができるようになれば、われわれの社会から失われつつある感覚を、再度、取り戻すことができるかもしれない。

（畠中宗一「関係性のなかでの自立」による）

問九 傍線部1の「これら」とは何を踏まえているか。次のイ、二の中から最も適切なものを一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 自己の未成熟を直視しないことと他者の欠点を容認すること。

ロ 自己を発見することと自己を成長させること。

ハ 他者と向き合うことを避けないこととアイデンティティを確立すること。

ニ 他者との関係性の回復と自身の主張を留保すること。

問十 空欄 A に入る適切な語句を、次のイ、二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 一触即発を察知する

ロ 臨機応変に対応する

ハ 絶体絶命を回避する

ニ 千載一遇を招来する

問十一 傍線部2について、筆者は「個としての自立」が内面化されることと自己の納得にこだわる人々が増えたことの関係についてどのように考えているか。次のイ、二の中から最も適切なものを一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 「個としての自立」を、自己主張を貫き通すことであると考え人々が、他者の意見を受け入れる際に自身がそれを承諾できているかどうかに重点を置く傾向が出て来たということ。

ロ 「個としての自立」を、組織課題の遂行に自身がどれほど貢献しているかという尺度で判断する人々が増えたために、他人からの評価にまどわされることなく自己評価に重点を置く傾向が出て来たということ。

ハ 「個としての自立」を、全体性の中で捉えようとする人々が増えたために、ともに組織課題に取り組むメンバーからの評価と自分自身の達成度との間で葛藤する傾向が出て来たということ。

ニ 「個としての自立」を、ジレンマを超越し自説を実現し得たかどうかを基準にする人々が増えたために、他者の主張に従い全体の流れに自身が追隨していることをよしとしない傾向が出て来たということ。

問十二 傍線部3のカタカナ部分にあたる漢字を含むものを、次のイ・ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。
イ ト航 □ ト中 ハ ト書 ニ ト露 ホ ト党

問十三 傍線部4「引き際という感覚」とは、ここでは具体的にどのような感覚を指すか。次のイ・二の中から最も適切なものを一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 誰にとっても最も重要であるのは時間であることを認識し、結論に向けて意思統一する感覚。
□ 自身の考え方を説得的に打ち出し、周囲を説得し得たタイミングを見逃さない感覚。
ハ 全体の状況を把握して、自説を主張し続けることの有効性と限界とを見極める感覚。
ニ 対立する相手に対して積極性を維持しつつ、自身の主張を変化させる感覚。

問十四 傍線部5「関係性を生きる」とは、ここではどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のイ・二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 自分がそうであるように、その相手にとっても、他者に対する不満をぶつけたときはその相手を追い込み、自分の未熟さを認めれば自身が傷つくといったことが繰り返られていることを知ること。
□ アイデンティティの確立と他者理解という、本来は同時に成立しない事柄を同時に受け入れるということであり、自他ともにそれが成し遂げられているかどうかについて確認し合う作業の繰り返しであるということ。
ハ 自己の想いはかならずしも正確には相手に伝わらないという現実を容認することであり、そのことを相手も同様に受け入れることができたときに真のコミュニケーションの成立が可能になるということ。
ニ 自立とは、文化背景の異なる他者へのチャレンジそのものであり、互いのアイデンティティの確立が十分であるかどうかの相互確認を欠かすことができないため絶え間のない葛藤を伴うということ。

問十五 空欄 B C D に入るふさわしいことはそれぞれイ・□の中から選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 自己 □ 他者

問十六 本文が述べている内容と合致するものを、次のイ・ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 他者との葛藤は、それが予想できるものであれば回避することが望ましいものであり、それらをいたずらにひきおこしてしまうのは、情緒的自立が不十分である証である。
□ 関係性の中での自立とは、組織課題の遂行のその際に、自身以外の人々に対してどれほど想像力を働かせ得るかという形でその成熟度が試される。
ハ 自己の納得にこだわる人々の多くは、他者に対して自身と同様の水準の達成を要求する傾向があり、そのことが結果として組織課題を実現する大きな原動力となっている。
ニ 現代人は他者を愛する力を喪失してしまったが、それは自己のアイデンティティの確立がないがしろにされてしまった結果、自分以外の人々に対して責任ある主張ができなくなったことが原因である。
ホ 喜びや楽しみといった肯定的な感情の経験が薄弱であると、自尊心が培われず、情緒的自立も阻害されるため、周囲の人々との温かな交流ができなくなる。

(三) 次の文章は、筆者が旅立ちにあたって別れの挨拶をしようと東宮に参った折の記事である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

十一日、下るも幾程なければ、いとど名残も多くて、暮るる程に東宮に参りぬ。廂に出御あり。いかに思ふらむなど打ち湿りおはしまし、常灯も参らず、月¹御覽²せられておはします。大方にだにこほれやすき涙の、いかでかかかる御気色につれなからむや。いひ知らぬ袖の上なり。月をだに宿して見むには、げに濡るる光にてもあらまし。「仲頼といふ新院の上北面、名残とてまうで来たり」と申せば、ただ今出でむもいと口惜し。又出でざらむも人のため情なかるべし。とばかりありて、ちとこの由を申して、やがて帰^Aり参らむとて、頼成を申して相具³して出でぬ。盃廻る程なく又参りぬ。又出でさせ給ひて、今宵は名残なれば、御とのごもることあらじとて、月をのみ眺めおはします。御前に顕範、信有、頼成ばかりなり。女房、按察局、右衛門督の君なり。更闌け夜更けて、月入り方になりぬ。御物語ども優にて、人々思はぬ涙も、折からにや、しほるばかりなり。御琵琶召し出だされて、掻き合せばかり、忍びやかなり。信有感に堪へず、折に合ふ朗詠・今様しつつ、情多し。頼成笛とり出でて吹く。顕範笙持たずして口惜しがれど、甲斐なし。時々唱歌し、皮笛吹く。ふつつかなる音とかや申したれど、いと興あり。孟嘗君が雍門に泣きけるも思ひ知らる。和琴沙汰なければ、進み申すに及ばず。樂一つ二つ後に、右衛門督の君に御琵琶賜はす。「名残に手一つ」と仰せあれば、もとは盤渉調なるを反風香調に調めあげて、丘泉が二手、又「思ひ出でに」と申せば、手一つあり。身にしみておほゆ。今宵の仕儀、なかなか何と記し置きがたし。よろしき事こそ筆にいひなすことも侍れ、これは言の葉も心も及びがたければ、昔の紫式部ならでは、ただの人の心地及びがたからむかし。ただ打ち籠めて心にいひ合せて、行末も思ひ出でむかし。明けてぞ出でぬる。

(飛鳥井雅有『春の深山路』による)

(注) 上北面：新院を警護する武士。 皮笛：口笛。 孟嘗君：中国、戦国時代の斉の宰相。

雍門：斉の西の城門近くに住んでいた琴の名手。 盤渉調：琵琶の演奏法の一つ。

反風香調：琵琶の調べの一つ。 丘泉：琵琶の反風香調の曲名。

問十七 傍線部1「月」は、どのような月か。最も適切なものを、次のイ、二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 東の空に出ている、満月に近い月。

ロ 西の空に沈みかけている、土弦の月。

ハ 左半分近くが欠け、空高く出ている月。

二 臥待月といわれる、東から出たばかりの月。

問十八 傍線部2の現代語訳として最も適切なものを、次のイ、二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ なぜ、このご様子のままの冷たい態度でおられるのだろうか。

ロ どうして、このようなご様子に、泣かずに平気でいられようか。

ハ どうしたら、このようなご様子に付き合うことができるだろうか。

二 何とかして、このご様子に素っ気なくしてられないものだろうか。

問十九 二重傍線部A、Dの主語を、それぞれ次のイ、ロの中から一つずつ選び、それぞれその解答欄にマークせよ。なお、同じ記号を何度使ってもよい。

イ 筆者 ロ 東宮 ハ 仲頼 二 人々 ホ 信有 ヘ 顕範 ト 右衛門督の君

問二十 傍線部3「相具し」と同じ活用の動詞を、本文の傍線部①、④の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

問二十一 傍線部4の東宮の様子を説明した文章として、最も適切なものを、次のイ～二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 月にあこがれつつ、人の世の煩わしさから逃れようとするさま。
ロ ただ月を賞美することで、別れの悲しさに堪えようとするさま。
ハ 今宵限りの月の美しさに、この世の無常を噛みしめているさま。
ニ 寝ようとしても寝られぬまま、風流心から月を眺めているさま。

問二十二 傍線部5「今様」の代表的な作品集を、次のイ～二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 閑吟集 ロ 凌雲集 ハ 梁塵秘抄 ニ 新古今和歌集

問二十三 傍線部6・7の意味として最も適切なものを、それぞれ次のイ～二の中から一つずつ選び、それぞれその解答欄にマークせよ。

- 6 イ 普通程度のことならば文章に書くこともできるだろうが、
ロ すばらしいことこそ文章に書き表す価値もあるだろうが、
ハ 価値のあることこそ文章として残す必要があるだろうが、
ニ 当たり前のことでも感動的に書くこともできるだろうが、
7 イ 密かにお互いの約束事において、
ロ 部屋に籠もってうち解けあって相談して、
ハ そつと同じ気持ちだとお互いに言い合って、
ニ ただうちに隠して心の中で言うだけにして、

問二十四 次の漢文は、問題文中にも登場する孟嘗君と雍門の交流の様子について述べた文章である。これを読んで、あとの(1)～(3)の問いに答えよ(返り点、送り仮名を省いた箇所がある)。

昔、雍門子、以^テ哭^ヲ見^ユ於^ニ孟嘗君^ニ。已^{ニシテ}而^レ陳^{のベ}辭^ヲ通^ジ意^ヲ、撫^シ心^ヲ發^ス聲^ヲ。孟嘗君為^レ之^ガ、増々歎^{ひせひてあう}。歎^{あつン}、流涕^{ろう}狼戾^{れいシテ}、不可^{カラ}止^ム。精神^ア形^ニ於^ニ内^ニ、而^レ外^ニ諭^ニ哀^ニ於^ニ人心^ニ、此^レ不^レ伝^{ナリ}之道^ニ。使^ハ俗人不得^ズ其^レ君形^ニ者、而^レ效^ス其^レ容^ニ、必^ズ為人^ニ所笑^ス。

(劉安「淮南子」卷六による)

(注) 雍門子…雍門のこと。

歎^{あつン}…声が出なくなること。

流涕狼戾…涙が盛んに流れるありさま。

(1) 傍線部Aはどのようなことを言おうとしているのか。最も適切なものを、次のイ～二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 心の騒^{ひだ}を表現する力を身につける中で、悲しみという感情もより豊かなものとなっていくのだが、
ロ 相手を思う気持が込められていれば、それが悲哀となって自然と外見にもにじみ出てくるのだが、
ハ 自らの内面を確固としたものとしてこそ、周囲の人間の悲しみにも共感できるようになるのだが、
ニ 真心が内面に出来上がっているからこそ、悲しみの心を他人にも感じさせることができるのだが、

(2) 傍線部Bは、「平凡な人間で、君主の心形をつかむことのできない者に、外見だけ真似をさせても」という大意である。この意味を踏まえて返り点を施す場合、最も適切なものを、次のイ、ハの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 使_下俗人 不_中得_二其君形_上者 而效_二其容_一
ロ 使_下俗人 不_レ得_二其君形_一者 而效_中其容_上
ハ 使_二俗人_一 不_レ得_二其君形_一者 而效_二其容_一
ニ 使_二俗人_一 不_レ得_三其君形_一者 而效_二其容_一

(3) 傍線部Cの文意を変えることなく、「必」 「笑於人」と言い換えた場合、空欄に入るべき漢字として最も適切なものを、次のイ、ハの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 能 ロ 莫 ハ 見 ニ 如 ホ 令

〔以下余白〕